

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月8日現在

機関番号：16101
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23652118
 研究課題名（和文） ビジュアル・シンキング・ストラテジー（VTS）を援用した新しい日本語教育の試み
 研究課題名（英文） A New Approach in Japanese Language Education by Using Visual Thinking Strategies (VTS)
 研究代表者
 橋本 智 (HASHIMOTO SATOSHI)
 徳島大学・国際センター・准教授
 研究者番号：90466920

研究成果の概要（和文）：

Visual Thinking Strategies (VTS)が日本語教育へ応用可能であるかを検討した。実際に日本語教師が日本語教育としてVTSセッションとVTSを使わずアート作品を利用したセッションを行い、教師と参加学生（日本語学習者）へのアンケートをし、両セッションでの教師と学生の発話を分析した。VTSセッションでは学生から肯定的な反応が得られたが、教師からは新しい教授法としての問題点が挙げられた。発話の分析をみると、ファシリテーターである教師の役割が談話上でより限定的なものになっていた。教師が常に学習者の発話のパラフレーズを行うVTSは、日本語教育にも援用可能なものである。

研究成果の概要（英文）：

Visual Thinking Strategies (VTS) is a new concept in the art education field, and it is considered to be an effective tool to develop students' communication skills in Japanese language. The VTS sessions and non-VTS sessions were conducted to analyze the interaction between the teachers (facilitators) and students. The students who participated in the VTS sessions gave positive reactions, but teachers raised a doubt with effectiveness as a new teaching method. According to the analysis of the interaction in the VTS sessions, the role of the teachers was limited.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：VTS、ビジュアル・シンキング・ストラテジー、日本語教育、ディスカッション、インターアクション、ファシリテーター

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本語教育では、教師主導型の教育が主に行われてきた。つまり教師が必要だと思ふ知識を授業で与え、教師は教室内のすべての活動を主導する「管理者」（池田2009）としての役割を果たしてきた。しかし、最近この教師主導型教育からの転換が求められるようになってきている。その背景には、多文化共生社会においてより一層高度なコミュニケーションが必要とされ、社会の構成員

同士が円滑な相互交流をすることが求められていることが挙げられる。そのような社会の動向を踏まえ、日本語教育活動の中での教師の役割が再検討され、教師が「教室の管理者」から「学習の支援者」に移行すべきという考え（池田2009）がみられるようになってきている。しかしながら、「学習の支援者」あるいは「ファシリテーター」（倉持2002）という教師の役割については、まだ明確な定義がなされておらず、この考えに基づいた実践

の報告も少ない。

美術教育でも、まさにこれと同じような流れがある。これまでの美術教育では、「教えよう」「知ってもらおう」とする教育観に基づき、美術作品の作者や技術に関する知識や情報を子どもたちに与える方法が一般に行われてきた(上野 2001)。しかし、最近「ビジュアル・シンキング・ストラテジー」(VTS)という新しい美術鑑賞プログラムが開発され広がりを見せている。VTSでは、美術館スタッフや教師は支援者・ファシリテーターとして、鑑賞者との対話を組織化し交流を形成する役割を持つ。作品の意味や価値は、鑑賞者の意見が相互に交流する過程で創出され、自ら考え自ら学ぶように支援されることで「生きる力」を培うことができる(上野 2001)とされている。

アメリカや日本の美術館で実践されているVTSのコンセプトは、日本語教育がこれから目指す方向性にも合致する。教える側の教授の効率性や合理性よりも、学習者間の対話や協働的学びが尊重される教室文化を創造するための方策として、日本語教育にこのビジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)を取り入れることは、大変意義があると考えられる。

2. 研究の目的

(1) ビジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)の理論を理解し、日本語教育に援用できるかを考える。

(2) VTSを取り入れた授業によって、日本語教師の役割を変化させることができるかを検証する(教室の管理者から学習の支援者・ファシリテーターへ)。

(3) VTSを取り入れた授業と従来型のアート作品を利用した授業を比較し、教師の役割や教師と学生とのインターアクションを比較し、VTSの日本語教育への援用の効果性を検証する。

3. 研究の方法

(1) VTS ビジュアル・シンキング・ストラテジーの内容の調査と検討

VTSの具体的な内容を調査する。VTSを美術鑑賞教育で実践し教育関係者に大きな影響を与えたマーガレット・バーチュネル(イサベラ・スチュアート・ガードナー美術館)やフィリップ・イェナワイン(Visual Understanding in Education)を取材し、VTSを実践している美術館を調査する。ワークショップに参加したり、実践している美術館スタッフにインタビューしたりすること

で、VTSの理論と実践方法を明確にする。必要に応じて文献調査を行う。

(2) 日本語教育への援用の検討

VTSの理論や方法をどのように日本語教育に適用できるのかを検討する。

初めに理論の構築を行う。自己認識や他者理解に基づく対話型鑑賞法の理論を日本語教育の概念につなげ、また教師の支援者としての役割を明らかにする。

さらに、日本語教育におけるVTSを使った授業を行い、参加した学生、VTSを行った教師、観察者に対してアンケートを行い、その内容の妥当性を検討する。

(3) VTSの実践で得られたデータの分析

日本語教師が日本語学習者に実際にVTSを行い、その教師と学習者の相互の発話(インターアクション)を分析する。加えて、従来型のアート作品を使った日本語教育の方法で、VTSセッションと同じアート作品を使ってセッションを行い、それぞれのセッションのインターアクションを分析する。

4. 研究成果

(1) VTSの概要

ビジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)ではアート作品をよく見て、思ったことや感じたことを言語化し、ファシリテーター(教師)の言うことや他者の発言を受け入れ、自分の考えをさらに構築するよう助けられる。これまでの先行研究では、VTSを使った授業を受けることで学生の認知能力、観察・推察・論証能力、言語能力の向上が報告されている。また、VTSは美術鑑賞教育だけでなく、文学鑑賞、理科の実験・観察、ESL(英語を母語としない人に対する英語教育)でも使われている。

VTSは次のような内容で行われる。

1. 話し合いを始める前に、各自が静かに作品を鑑賞する時間を設ける
2. ファシリテーター(教師)は「この絵のなかで、いったい何が起きているんでしょうか」と質問する。
3. 手を上げさせ、ファシリテーターが指した人が発言する。
4. ファシリテーターは学習者の発言を言い換え(パラフレーズ)する。発言の主旨を変えずに言い方を変える。発言すべての言葉を言い換えるのではなく、要点をつかんで話す。正確な文章構造やより豊かな語彙を用いる。ファシリテーターは常に中立であり、学習者の発話に評価を加えたり、自分の考えを述べたりしない。

5. ファシリテーターは話題にのぼっている作品の部分の指で指す。「絵のどこから、そう思ったんですか」「なぜそう思ったんですか」と問いかけ、事実に基づいた論理展開を促す。短い発言の場合は、発言をそのまま繰り返す。
6. 作品の観察をさらに促す。「そのほかに、もっと発見はありますか」「他の人はどうですか?」「ほかに違う意見はありますか」と問う。
7. ファシリテーターは学習者の発言を関連づけ、同じ意見や反対する意見の関連性を示す。一人の発見・意見が他を刺激し変化し、話し合いが包括的に積み重なって構築されていくことを示す。
8. 最後に簡単な感想を述べる。「今日は、一枚の絵からいろいろな意見がでて、とてもおもしろかったです」。何回見ても新たな発見があるので、これで完結したと思わせないようにする。

(2) V T Sの実施

日本語教師が日本語学習者に対してV T Sを実際に行い、その反応を調べた。

V T Sセッションに対する満足度は、中級より上級のほうが顕著に高かった。話すことや語彙習得、ディスカッションの学習に効果的であるといった肯定的な反応が見られた。また、教師のパラフレーズに関しても、自分の言いたいことを言い換えてくれてよかった、ほかの人にも理解されたと思う、正しい日本語が分かった、など好意的な反応があった。

一方、V T Sを行った日本語教師へのインタビューからは、期待していたような発言が出ない、話題を膨らませたり質問したりすることができず不十分、という意見が出た。またパラフレーズの仕方で統一が取れず、難しいと感じていた。

アート作品を見て自由に意見を述べ、自分の発言を教師が言い換えてくれるという環境で、学生は安心して発言できたようだが、メモを取りたい、語彙や表現をまとめてほしいといった声もあり、V T Sを日本語教育で援用するためにはさらなる検討と工夫が必要である。

(3) 日本語教育の観点から見たV T Sの特徴

これまでもアート作品を使った日本語の授業は行われてきた。なぜV T Sという新しい方法が日本語教育で有効なものとなるのかを検討するため、アート作品を使ったV T Sのセッションとアート作品を使った従来型(非V T S)セッションを行い、それぞれの教師と学習者のインターアクションを比較、分析した。

ンを比較、分析した。

発言の分析にあたっては、杉本(2004)の表記方法を用い、教師-学習者間のインターアクションを観察するために、Sinclair & Coulthard(1975)の教室談話モデルと村岡(1999)の分類方法をもとに、必要な分類項目の追加を行った。

V T Sセッションでは、教師は発問をし、学習者の発言をパラフレーズするという限定的な役割(応答、受け入れ、まとめ、言い換え、関連付けなど)を果たしている。また、教師が話題の方向付けをしないために、まとまったディスカッションにならず、学習者の発言も比較的長かった。教師はファシリテーターに徹しており、学習者の自由な発言を保証しつつ、発言の内容をまとめ修正したり、発言の根拠を尋ねたりして、学習者が自主的に考えを述べ、自分の意見を組み立てていくのを助ける役割が明確であった。

一方、非V T Sセッションの日本語教師は、学習者の発言を促す様々な工夫(発問、指示、指名など)をしたり、参照型質問をしたりしていた。教師からの発問(I)-学生の反応(R)-教師の受け入れ(F)の「I-R-F」型が多く観察された。学習者の発言に対する反応も、言い換え、まとめ、評価、コメントなど多彩である。教師がディスカッションの方向付けをし、話題を焦点化するため、話し合いが収束する方向に進んでいた。

(4) 日本語教育への可能性

V T Sを使った授業では、自分の知識や以前の経験と新たに得た情報を結びつけ、自分の考えを言語化する訓練を行うことができる。同時に、自分で問題を発見し意見を構築していく学習を行うことが可能となり、批判的思考力(クリティカル・シンキング)を養う機会ともなる。このように、学習者の興味に基づき、学習者自らが考えるように励まし、それをもとに授業を展開する方法を用いることにより、「学習者主体型」の授業を行うことができる。従来の教師主導型の授業は、語彙や文法などの目標となるレベルまで学習者を引き上げることには効果的であるが、学習者の学習に対する主体性の育成、高い動機づけの維持、クリティカルシンキングの獲得などは難しい。もしV T Sが日本語教育で効果的に使えるなら、非常に有効なものとなるだろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① 山本朝彦 メトロポリタンでのフィリップ・ヤノウィン 研究報告書 査読無 2013 4-5

② 山木朝彦 V T S という鑑賞方法論に
みられる批判的思考 研究報告書 査読無
2013 6-7

③ 山木真理子 学びの支援者としての新
しい教師のあり方を目指して 研究報告書
査読無 2013 10-16

④ 橋本智 V T S の日本語教育への具体
的な援用と実践 研究報告書 査読無
2013 17-30

⑤ 橋本智、山木朝彦、山木真理子、古賀美
千留 Visual Thinking Strategies (VTS) の
日本語教育への応用を考える 日本語教育
方法研究会誌 査読有 Vol.19 No.1 2012
2-3

[学会発表] (計 1 件)

① 橋本智、山木朝彦、山木真理子、古賀美
千留 Visual Thinking Strategies (VTS) の
日本語教育への応用を考える 日本語教育
方法研究会 2012. 3. 10 国際基督教大学
(東京都)

[その他]

ホームページ等

「日本語教育 V T S 研究会」

<https://www.facebook.com/pages/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E6%95%99%E8%82%B2VTS%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A/452305371459165>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 智 (HASHIMOTO SATOSHI)
徳島大学・国際センター・准教授
研究者番号：90466920

(2) 研究分担者

山木 朝彦 (YAMAKI ASHIKO)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・
教授
研究者番号：20158083

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

山木 真理子 (YAMAKI MARIKO)
鳴門教育大学・非常勤講師

古賀 美千留 (KOGA MICHIRU)
鳴門教育大学・非常勤講師